

平成31年明星大学卒業生の塩谷里瑛です。教育学部教育学科小学校教員コースに在籍していました。佐藤先生には「初等英語指導法研究」と「初等英語科教育法」の授業でお世話になりました。

私は現在、さいたま市の小学校で5年生の担任をしています。今年で4年目となる教員生活の中で大切だと感じていることは『子どもの「やりたい」に応えること』です。それは当たり前なことなのでは？と思われるかもしれませんが。私も大学卒業時は、「子どもに寄り添い、共に良いクラスを作り上げるのが1番最初にやるべきこと」と考えていました。しかし、いざ担任になると、それを実践することがいかに難しいことかを思い知らされました。ここでは、私が担任1年目で失敗したこと、その失敗をいかした学級経営と授業実践の3つを話していきたいと思います。

初めに、担任1年目での失敗についてです。初担任は、現在と同じく5年生の担任でした。最初に述べた教員としての心がけを胸に挑んだ1年でしたが、正直その思いに反する生活でした。学級経営・授業準備・保護者対応、全てに時間がかかり余裕のない1日。かけた時間に対して結果がでない状況に「こんなに時間をかけているのになぜ上手にいかないだろう？」と落ち込んでいました。他の先生の授業や教室を見せていただいても改善にいたらず、当然のごとくクラスは荒れ、保護者からの問い合わせも続きました。そしてなぜこの状況に陥ってしまったのかに気づけたのは、恥ずかしながら1年目が終わった後でした。私の1年目は初めての緊急事態宣言が発出され、しばらく休校になった年でした。その間に改めて1年目を振り返り気づいたことは「自分の思いを子どもに押し付ける1年だった」ということです。授業の準備では、「指導書に書いてある、この方法で授業をするのが正解」「他のクラスの先生はこう教えていたから、自分のクラスも同じように」と、学級経営でも「他のクラスは～しているのに、どうして自分のクラスは」と考えながら指導していた自分。子どもに対しての言葉に担任の思いは無く、ただ「～しなさい」と伝える日々で、全くクラスの子どものことを考えていませんでした。「子どもに寄り添う」がこんなにも難しいことだと気づいた瞬間でした。自分の大切にしたいことは何だったのかを思い返し、「指導書は・・・他のクラスは・・・ではなく、自分のクラスの子は・・・」を常に考えられる教員であろうと改めて決意しました。

1年目の反省をいかし、まずは子どもの意見に耳を傾ける学級経営を実践して行きました。その一つはキャンペーンの実施です。クラスのめあてを決めた後に、「このめあてを達成するために、このクラスで頑張るべきことは何かな？」と子どもにアンケートをとりました。すると、「発表をする人が少ないから発言キャンペーン」「時間を意識して行動できるように時計見キャンペーン」「あいさつ返事をもっとしっかりできるように反応キャンペーン」と、様々な意見が出てきました。また、キャンペーンをやるだけでは意味がないという意見から、「ふりかえり係」を作りました。何人がキャンペーンを達成できたかを帰りの会で集計し、その数に応じて「ふりかえりツリー」に果物・花・動物を貼っています。全員達成は中々難しいのですが、「昨日よりも達成人数が増えた！」と、キャンペーンに対する意識は育ちました。子どもの気づきを、先生が引き出し形にしていくことで、「子どもと担任が一緒に作るクラス」に一步近づけたと感じています。

次に、授業実践についてです。「発言キャンペーン」の実施当初、行き詰まったのは挙手をする人はいつも同じメンバーであることです。その子たちに挙手をしない理由を尋ねる

と「間違えたら恥ずかしい」「一人で発表するのは目立って嫌だ」「手を挙げたいけど、答えが分からなくて挙げられる機会がない」という答えが返ってきました。答えは分かっているけど目立つのは苦手な子や、勉強が苦手だけど手を挙げられるようになりたい子がいることが分かりました。そこで発問の内容、方法を見直すことにしました。その一つが算数の「偶数・奇数」ゲームです。数がかかれたカードをランダムに黒板に貼り、偶数だったら右手、奇数だったら左手というように手を挙げさせます。これを授業最初に繰り返し実施することで、算数が苦手だと感じている子の手が少しずつ挙がり始めました。また、全員でやることで、恥ずかしくて挙手ができない子も参加できるようになりました。他にも出席番号・係の数・机の数など、教室にある様々な数を使ってこのゲームを行うことで、「これは偶数・奇数」と、数に対して子どもが注目する機会も増えました。

さて、ここまでの話を読むと「4年目の今は学級経営も授業も上手くいっているの？」と思われるかもしれませんが、全くそんなことはありません。今でも悩むこと失敗することはたくさんあります。しかし1年目と違うことは、その悩みの中に「クラスの子どもたち」の存在が常にあることです。「子どもの気持ちに寄り添う」は教員として当たり前なこと、しかしその当たり前を、時に見失ってしまうことがあります。指導書を読んだり、他の先生から授業法や学級経営を学んだりする時も、「自分のクラスの子だったら・・・」を忘れないように、これからの教員生活を歩んでいきたいです。